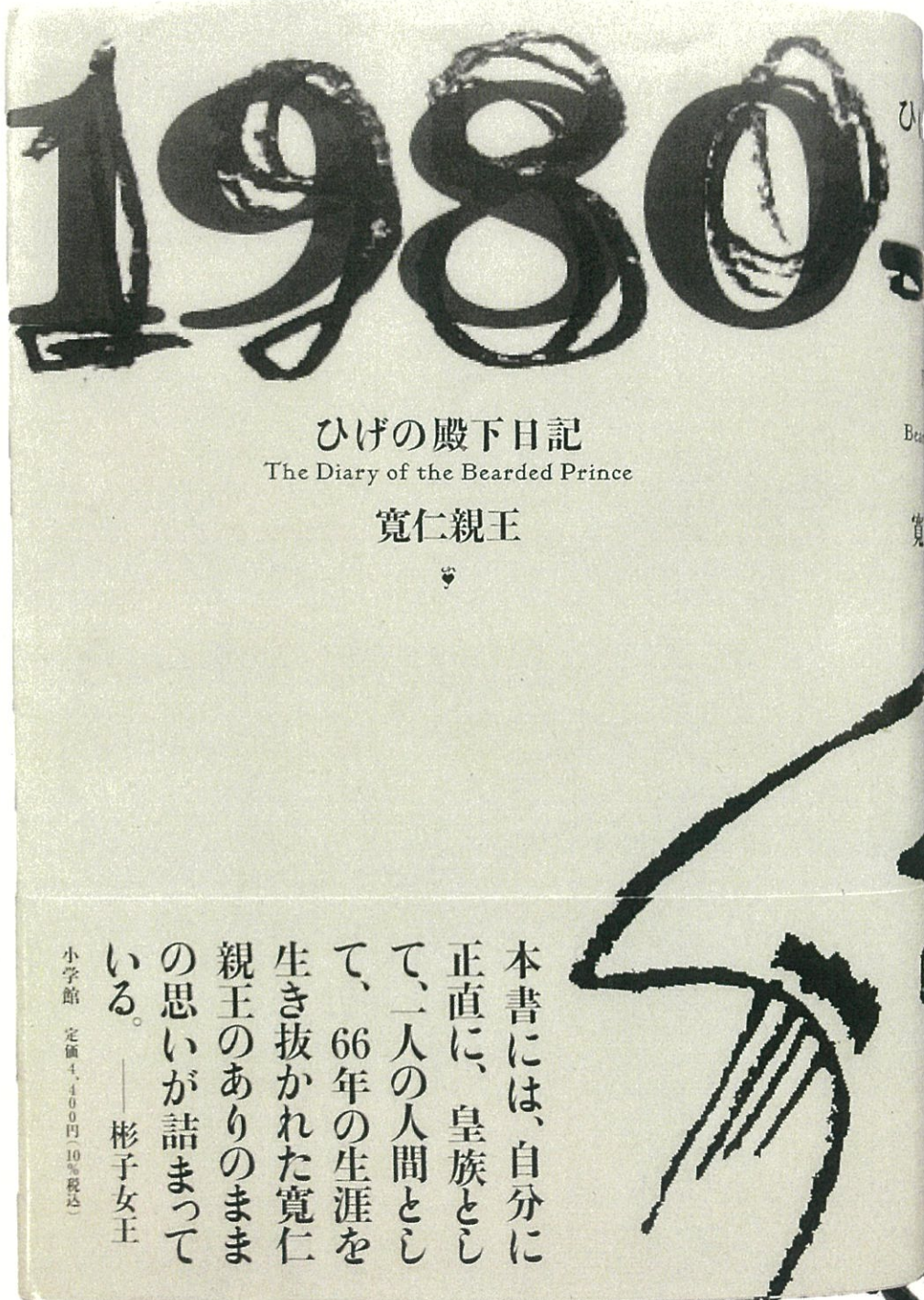


ザ★トド

『ひげの殿下日記』
発刊記念!特集

THE☆TODO SPECIAL ISSUE 2022.05.18



2022.06.01 ON SALE

『ひげの殿下日記』「はじめに」全文

文・彬子女王殿下

父の人生の軌跡をきちんと書き残したい。

そのことをずっと頭の片隅で思いながら、いつの間にか10年が経ってしまった。偏に私が目の前の仕事をこなしていっただけで日々精一杯で余裕がなかったからであり、父もきっと空の上で「いつまで待たせるんだ、お前は！」と怒っておられるに違いない。伏してお詫びを申し上げなければならぬと思っ

ている。父の十年式年祭も約1年半後に迫ってくる中で、これは本当になんとかしなければいけないと、小学館で私の担当を長年してくれている高木史郎氏に相談をした。当初は、父をご存じの方たちにインタビューをし、娘の私では知りえない父の姿を多角的に浮き彫りにできるような本にしたいと考えていた。編集の高橋亜弥子氏も交えた打ち合わせを何度か重ねていく中で、私が何気なく資料として渡したある冊子を見てから、高木氏の意見ががらりと変わった。「これ、このまま本にしましょう！」と言いつつ出したのである。その冊子は、父が創設され、亡くなられるまで会長を務められた福祉団体「柏朋会」の会報に、毎月父が寄せておられたコラム「とどのおしゃべり」をまとめたものだった。父の独身時代から、亡くなられる間際まで書き続けてこられたコラム。社会福祉のことはもちろん、日常の些細なできごとから、周囲のご友人、宮家職員、警察の人たちとのエピソード、娘たちの成長日記、公式行事のこと、お好きだったスキーのこと、そして度重なった癌との闘病のこと……父がそのときに感じられた様々なことが日記のように書き綴られている。会報でその都度読んできた文章だけれど、まとめて読むと、懐かしさと共に、そのときの父の思いが生々しく伝わってきて、胸に迫るものがあった。「生身の皇族の方の肉声と感情、そして生活が詰まった記録として、こんな貴重な史料はない」という高木氏の声に背中を押され、出版することを決めた。

「そのまま出版しても……」という声もあったが、ちょっと今の世に出すには刺激が強すぎるであろう話や、会員以外には伝わりにくい話などは、適宜省略するなどし、編集を加えた。でも、「～でせう」「云う」などの現代的な言葉遣いでないものなどは、父の文章らしさを象徴するものでもあるので、残してもらった。また、会員以外の目に触れることを想定してお書きになられた文章ではないので、かなりストレートな表現をされている部分も多々あるが、敢えてそのまま掲載することとした。少々読みにくいところもあるかもしれないが、ご容赦いただけたら幸いです。

父の文章を読み返していると、老眼鏡をかけ、肘をついておでこのあたりに手をやりながら、原稿を書かれていた父の姿があざやかに思い出される。極度の機械音痴であった父は、ワープロやパソコンを使われたことがない。横書きの原稿用紙に、事務官がまとめ買いしている安価な水性ボールペンで手書きされるのを、事務官や侍女が文字起こしをし、何度か校正を重ねて完成するというスタイルだった。ちなみに父は、かなりの悪筆である。読み慣れれば大体わかるのだが、急がれて筆が走っているときなど、何と書いてあるのか読めないときがよくある。事務所で職員が顔を寄せ合って、ああでもないこうでもないかと相談しているところに通りがかり、「彬子様！」と呼び止められて解説作業に手を貸したことが何度あったか思い出せない。前後の文章などから判明したときは、皆で「おー！」と手をたたき合い、妙な連帯感を覚えたものだし、結局わからずにその箇所を〇〇として返すことになるときは、なんだかちよっぴり悔しかった。

父は、いろいろな場所で原稿を書かれた。書斎の机が多かったけれど、居間のソファでスポーツ中継を流しながら煙草を片手にとり、新幹線や飛行機、車の中でなど、よくもまあこんな状況で集中してお書きになれるものだと、半ば感心、半ば呆れながらそのお姿を眺めていた。どこへ行くにも持ち歩いておられた「書類かばん」と称される大きなかばんには、原稿用紙や便箋、万年筆、プロッター（インクを吸い取る道具）、国語辞典や英和辞典など、紙の辞書が3、4冊常に入っていた。思い立ったときにいつでも原稿が書けるように、ありとあらゆる必要と思われる道具が入っていたわけだが、とにかく腕が抜けるくらい重かった。細身の事務官がこのかばんを持ちながら、よろよろ歩いているのを見て、「俺が持つ！」と奪い取って颯爽と歩かれていたのが懐かしい。本当に「仕事が趣味」を地で行かれる方だった。

世間の多くの方々が父に対して抱かれているイメージは、「豪放磊落」「皇室の異端児」「物申す皇族」など、「強い」印象が多いように思う。もちろんそういった一面も多分にあるのだけれど、三笠宮妃殿下が「昔から本当に繊細で、ガラスのように壊れやすい子だったのよ」と仰る通り、神経質で、心配性で、とても傷つきやすい方でもあった。強く見せていたのは、それを防御するための鎧のようなものでもあったのだろうと思う。ご晩年、たくさんの方たちがお見舞いに来ようとされたが、「弱ったトモさんの姿を見せたくない」と、ほとんどお断りになっていたことが象徴しているだろう。

父の文章の中でも、特にご晩年の闘病記は壮絶で、読みながら私も当時のことを思い出し、苦しくなる。未だに忘れることができないのが、父の最後の癌が見つかったときのことだ。父に呼ばれ、「もう俺の体はボロボロだ。声も出ない。歯もガタガタで、ろくなものも食べられない。これ以上切り刻まれるのは御免だから、手術はやめて、癌と共に俺は死のうと思う」と言われたのだ。私は、「おとうまのお気持ちは、とてもよくわかります。私も同じ状況になったら、同じように思うかもしれない。でも、手術をすればその癌がなくなり、回復されるという選択肢がある中で、だんだんと癌が大きくなり、だんだんと苦しくなっていくおとうまの姿を見るのは、家族としてはつらいです」と申し上げた。「そうか」と言われたけれど、お気持ちは変わらないようだった。

それからしばらくして、三笠宮殿下が訪ねてこられた。父の御寝室まで上がられ、しばらくお話をされた。私の記憶にある限り、父が「ちょっとお袋に相談してくるわ」などと言われてご本邸にお出ましになることは時々あったけれど、お祝い事などの行事でもない限り、殿下が寛仁親王邸にいらっしゃることはほとんどなかったから、これはただならぬことだと思った。殿下は手術をするべきだという話をされ、最後に「おばあちゃまの気持ちを考えてやってくれ」と仰ったそうだ。殿下がお帰りのになった後、「親父にあんなことを言われたのは生まれて初めてだ」と言われ、父は手術を受けることを決断された。

このとき、三笠宮殿下はお帰り際、御寝室の外で控えていた事務官と侍女長補に、「こんな感じでよろしかったですか？」とニコニコしながら声をかけられた。陸軍軍人であられた殿下は、お声がとても通る上に御御大きく、内緒話はおできにならない。当然御寝室の中にもしっかり聞こえており、「聞こえてますよ！」とドアの向こうから父の声が返ってきた。とても三笠宮父子らしいエピソードだと思う。

結局父は手術を受けられ、その数か月後に旅立たれた。未だに私は、あのときの私の返答は正しかったのかと自問自答する。父の仰る通り、手術という体に大きな負担をかける道よりも、癌と共にゆっくりと過ごしていく道を選ばれた方が、父にとって穏やかな時間になったのではなかったか、と。「頑固で、こう決められたことは真っ直ぐに貫かれる殿下が、ご自身で納得して手術をされることを決められたのですから」と周りの人は言ってくれる。でも私は、これからも答えの出ない問いの答えを考え続けるだろう。

父のモットーは「正直」だった。学習院院長であった安倍能成先生の「正直であれ」という言葉を子どもの頃から大切に思っておられたそう、ああ見えて嘘はつかれない方だったし、周りから煙たがられても、正直に思ったことを発言してこられた。癌やアルコール依存症という事実を公表してこられたのも、このような思いをお持ちだったからである。本書には、自分に正直に、皇族として、一人の人間として、66年の生涯を生き抜かれた寛仁親王のありのままの思いが詰まっている。10年という節目の年に、本書を通して、少しでも多くの方たちに父の思いが伝わることを願っている。

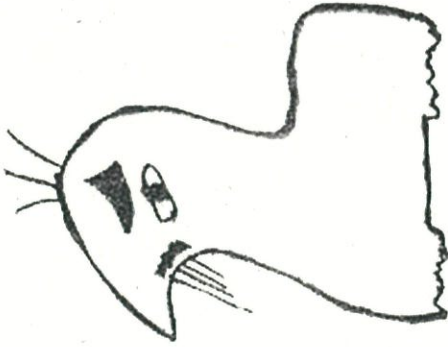
出版にあたり、巻末の鼎談の申し出を快くお引き受けくださった黒川光博・光隆御兄弟を始め、最後まで妥協せず、いつものように思いのこもった「らしい」装丁をしてくださった木村裕治氏、編集の労を取ってくださった高木史郎・高橋亜弥子両氏、関わってくださったすべての方々へ心よりの感謝を申し上げつつ、序文に代えさせていただきますことにしたい。

令和四年如月
大文字山を望む書斎にて

本書を読み解く 7つのKeywords

1 ニックネームの”とど”を描いたカバーは自画像

副将としていぼり返っていた頃、偶然どこかの動物園からトドが逃げ出して岡田川に入り、上流に漂ってしまっただけのことがある。トドというのは人畜有害であり危険な動物であるから、自衛隊の狙撃班が出動して何発も撃ち込んだあげくに、やっとなめさす事ができた。このニュースを讀んだ同級生部員が、「自意識過剰でケンカっ早く、向にでも反抗して欲しい様のないいカササは、人畜有害のあのトドと同じだ!」と叫び出したのが私のあだ名の由来である。
(「とど」の由来)1980.10.19



2 100% written by Prince Tomohito of Mikasa

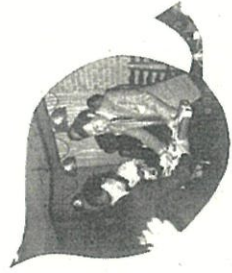
第一号から第三号までの原稿は例会場であったり元赤坂御坂寓所なる所で書くことになると同時に、今号が我が独身最後の原稿書きとなるわけで、本三冊を始めとしてあらゆる所に原稿を書いていた私としては、いささか感慨深い思いでこれを書いている。
(「五回目的の引越」1980.11.16)

Handwritten note: 100% written by Prince Tomohito of Mikasa. (Original text: 100% written by Prince Tomohito of Mikasa)

Handwritten note: 御親知の通り、身体が完全に完全、まてん(空気の圧縮状態の割合)60%以上と保証、本号より4回且迄の1/3以下で、白の活版が何れりません。 巻頭、その少しの活版の事で、巻頭、

3 共生社会を先導した柏朋会とは?

柏朋会は、昭和五十四年四月、身障者の会友援助団が名称変更して、発足したものである。会のモットーは、障害のある者もない者も、共にボランティアをすることによって、社会に役立つべく、能力開発をしていこうというものである。我が国の福祉は未だ問題されている者から、そうでない者に対する一方通行の行為が多かった。例えば、行政体から身障者へ、お金持ちから貧乏な人へ、健常者から障害者へという風に……。別の云い方をすれば健康者に優る同情心やほどこし気分のベースにした行為があり、極論すれば差別になってしまふ。
(「柏朋会とは?」1980.08.17)



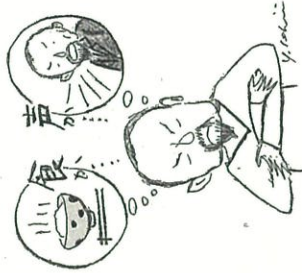
4 ひげの殿下と愉快な仲間たち

私は少し通っていて、「趣味は何か?」と問われれば、「文句なく「人間」に答えますし、「貴方の財産は何ですか?」と問われたら、間違いないで、「私の財産は、国内外に無敵に居る友達」と答えます。
(「人間を大切に」2001.09.30)



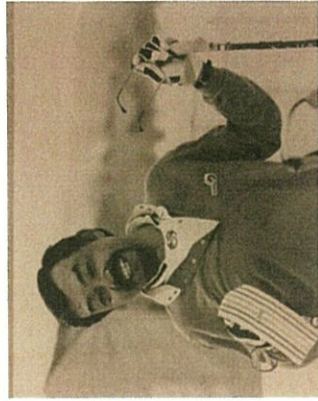
6 克明に記されたがんと闘い

「音声」を残すか、「食」を残すかについては、随分悩まされた。前述のごとく一昨年から判っていた事ですから時間的余裕を掛けて真剣に考えていた試みですが、結局「音声」を残しても、「食」が栄養剤のみになって、フラフラ状態で入退院を繰り返す等という状態になるよりは、身体は丈夫で、「音声」が無いという方が私にとっては良いと思っていました。
(「ヴァイブレーションター(人工喉頭)」2009.03.31)



5 30年にわたって綴られた素顔

まずお詫びを! 本来九月三十日発行予定の第一号が、私の十四回目の機手術・入院の為延期せざるを得なくなり、本年の最終号を迎えてしまいました。編集長として誠に遺憾に思いますが、初めての事として、平に御容赦願ひ申し上げます。二十年間に十四回というのはいかににも確幸が重なり、思いますが、本人としては罹患する以前から、我が一般は癌に罹り易いDNAを持っていると判っていましたので、皆様が思われる程驚いてはいません。
(「近況雑感」2011.12.20)



7 彬子女王殿下の父への思い

父の御身時代から、亡くなられる間際まで書き続けてきたコラム。社会福祉のこととはもちろん、日常の些細なことからも、周囲の同友人、宮家職員、警察の人たちとのエピソード、娘たちの成長日記、公式行事のこと、お好きだったスキのこと、そして度重なった癌との闘病のこと……父がそのときに感じられた様々なことが日記のように書き綴られている。会報でその節度感んできた文章だけだと、まとめで読むと、懐かしさと共に、そのときの父の思いが生々しく伝わってきて、胸に迫るものがあった。
(彬子女王殿下「はじめに」全文は右ページ)





寛仁親王殿下 ともひとしんのう

1946年1月5日、大正天皇第四皇子である三笠宮崇仁親王の第一男子として誕生。1968年、学習院大学法学部政治学科卒業後、英国オックスフォード大学モードリン・コレッジに留学。帰国後、札幌オリンピック冬季大会組織委員会事務局、沖縄国際海洋博覧会世界海洋青少年大会事務局に勤務。「ひげの殿下」の愛称で国民に親しまれ、柏朋会やありのまま舎などの運営に関わり、障害者福祉や、スポーツ振興、青少年育成、国際親善など幅広い分野の活動に取り組まれた。著書に『トモさんのえげれず留学』（文藝春秋）、『皇族のひとりごと』（二見書房）、『雪は友だち—トモさんの身障者スキー教室』（光文社）、『今ペールを脱ぐ ジェントルマンの極意』（小学館）など。2012年薨去。

彬子女王殿下 あきこじょう

1981年12月20日、寛仁親王の第一女子として誕生。学習院大学を卒業後、オックスフォード大学マートン・コレッジに留学。日本美術史を専攻し、海外に流出した日本美術に関する調査・研究を行い、2010年に博士号を取得。女性皇族として博士号は史上初。現在、京都産業大学日本文化研究所特別教授、京都市立芸術大学客員教授他。子どもたちに日本文化を伝えるための「心游舎」を創設し、全国で活動中。『赤と青のガウン オックスフォード留学記』（PHP研究所）『京都ものがたりの道』（毎日新聞出版）『日本美のこころ』『日本美のこころ 最後の職人ものがたり』（ともに小学館）など著書多数。

『ひげの殿下日記～The Diary of the Bearded Prince～』
定価 4,400円(税込) 2022年6月1日頃発売
判型/四六判上製・608ページ ISBN978-4-09-388859-2

●本書の問い合わせ先

担当編集者：高木史郎
〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1小学館文化事業局
電話：03-3230-5675 E-mail：warakufacebook@gmail.com